

(揖宿郡喜入町大字生見字帖地)

位置と環境

帖地遺跡は町の中心部から、南に約7km離れた、薩摩半島南部の標高100m前後の南向きの台地に位置し、対岸の指宿市小牧台地を見渡せる平安時代から旧石器時代までの遺物を含む複合遺跡である。

遺跡の石材環境は古代から豊かで、周辺には、約150万年前の火山活動によってもたらされた生見金山跡を初めとする南薩金銀鉱床脈からなる瑪瑙脈の露頭が点在し、約25,000年前の始良カルデラの巨大噴火(AT降灰)以前から、遺跡周辺の瑪瑙、頁岩、水晶を石材として使用している。さらに、この時期に出土した黒曜石を蛍光X線分析した結果、大口市日東産の黒曜石を主要石材とし、さらに、北部九州の長崎県針尾産や佐賀県腰岳産の黒曜石も使用しており、はるか古代から北部九州と石材の交流が広がっていたことが判明している。

調査の経緯

帖地地区の基盤整備促進事業に伴い、県教育委員会の協力を得て、町教育委員会が平成7年から平成10年度にかけ本調査(12,306㎡)を実施した。

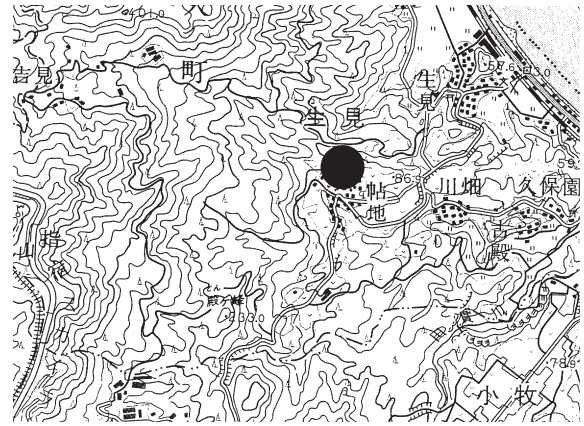
遺構と遺物

旧石器時代には4文化層が存在した(写真2)。

このうちシラス直下(大隅降下軽石層A-os)のXⅧ層から、遺構として礫群と赤色の焦土や炭化物が検出されている。遺物の主体は、小型ナイフ形石器が出土している。シラス直上のXⅣ層からは、遺物として剥片尖頭器、台形様石器、XⅢ層からは、遺物として三稜尖頭器が出土している。XⅡ層(XⅠ層の薩摩火山灰層(Sz-S)下面)では、細石刃文化期に、共伴遺物として木葉形の石槍が1点、局部磨製石斧1点、石鏃1点、土器片7点が共伴遺物として出土した(第2図)(写真1)。これらの各層に遺構として礫群が検出されている。

縄文時代の土器文化は実に多様で、主要な文化をあげると。

①縄文時代早期の、口縁部に刻みのある条痕文土器に伴い、これまで南九州には類例のない、帖地型石



第1図 帖地遺跡の位置

鏃と銘々された袈りの僅かに入った流麗な石鏃が大量に制作されたエリアが存在した。

②縄文時代前期の曾畑式・轟式土器文化

③縄文時代中期の阿高式土器文化

④縄文時代後期の土器は、遺跡全体の広範囲に大量に出土した。

(1)指宿式土器文化は、装飾性の強い、朱の塗られた痕跡のある土器が出土した。

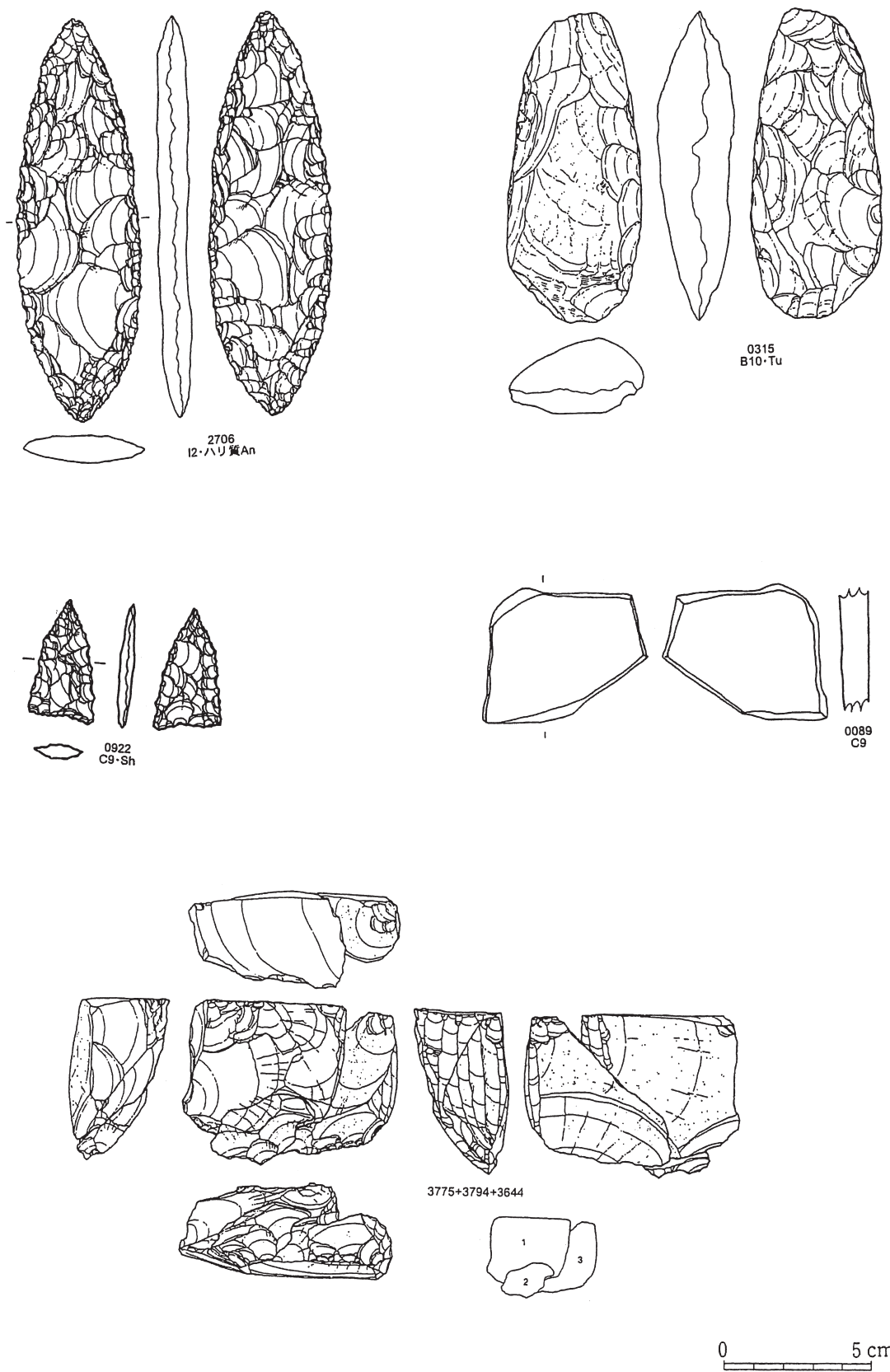
(2)松山式土器文化には、4個組の完形の土器がいれこの状態で横倒しで出土した。(第3図)、この周辺からは完形の石皿も出土し、付近には住居状遺構も検出されたことからみて、実際の生活に使用された同時期に制作されたものである。このいれこのセットは収納するために合理的な組み合わせで、また、それぞれの土器の大きさの違いから、機能や用途による使いわけや、所有者の区別がなされていたことや、集団生活によってどれだけの数量の土器が必要であったかを考えるうえで貴重な資料といえる。

(3)市来式土器文化では、共伴遺物として南島系の面縄東洞式土器に類似した施文をもつ土器片も出土した。

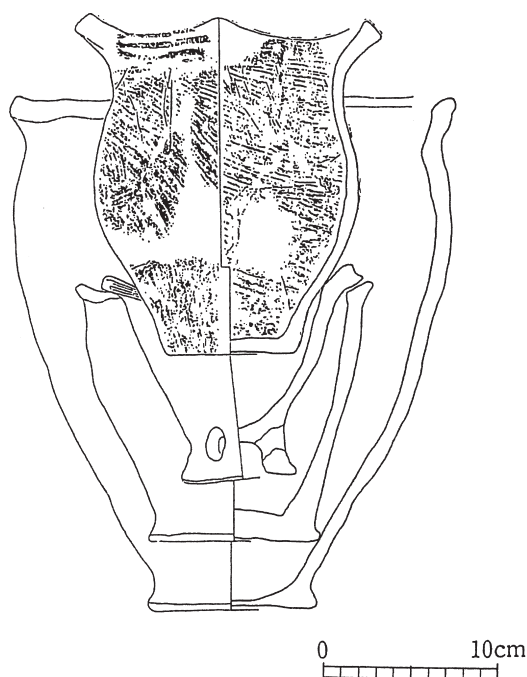
⑤縄文時代晩期の黒色研磨土器・組織痕土器などほかに弥生時代の遺物として、前期の高橋Ⅱ式土器が、古墳時代の成川式土器、平安時代の遺物として墨書土器等が出土した。

特徴

帖地遺跡のXⅡ層中の遺物(写真1)は、XⅠ層の薩摩桜島火山灰層(Sz-S、約11,500年前)の下面、約15cmから30cmの地点に遺物の集中がみられ、



第2図 帖地遺跡X II層の出土遺物



第3図 松山式土器のいれこ

このXII層からは、全国で初めて船野型細石刃核とともに神子柴型の石槍と局部磨製石斧、さらに土器と石鏃が共伴遺物として同一地層中から出土した事例である。以下個別に特徴をあげると。

① 細石刃核

船野型細石刃核の製作を主体とする文化であり、細石刃の製作所として、多くの接合関係が認められた。

この細石刃核の資料には、制作課程で固定具の使用を示した痕跡が顕著に認められる細石刃核も存在した。このことは当時の石器制作の技術水準の高度さを示すものである。

③ 石鏃

先端の尖った二等辺三角形で、フラットに器面を調整した石鏃が1点出土している。

② 土器

7点の土器片が出土している。いずれも細片であり、器壁は薄いため物理的な耐久度からみて、土器の法量はそう大きくないものが想定される無文土器と考えられる。

④ 石槍

柳葉形で、石器の中位に最大幅のある神子柴型の優美な完形の石槍が1点出土している。

⑤ 石斧

全体に風化を受け、基部は尖り、基部と刃部に研磨が施され、断面は三角形で刃部の裏面には縦方向の剥離がなされた凝灰岩製の局部磨製石斧が1点出土している。

この意味することは、縄文時代草創期初頭の東日本を中心とした神子柴・長者久保文化が南九州の帖地まで到達したことが判明したことにより、これまで西日本を中心とした細石器に伴う土器の発生期とされる福井洞窟や泉福寺洞窟の土器文化とが融合していた可能性が想定されたことにより、縄文時代の始まりを一元化されたモデルとして説明できることを示したこと。さらに、現在、この神子柴文化に伴う土器が、日本で最も古い時期のものと考えられていること。さらに、南九州だけにこの時期、遺物として石鏃が多く遺跡で出土していることで、この南九州の石鏃文化が日本でいち早く定着したものであるという可能性が想定できることから、南九州で先行した石鏃文化が、いわゆる神子柴文化の石槍や局部磨製石斧の隆盛をみなかったこと、そして、後続する有茎尖頭器文化の伝播のいわば抑止力として働いた可能性も想定されてくるのである。

このように帖地遺跡のXII層の遺物は、「日本の縄文時代がどのように準備されて開始されたか」を知る上で重要な資料として注目されている。

資料の所在

出土遺物は、喜入町教育委員会に保管されている。

参考文献

喜入町教育委員会1999「帖地遺跡縄文編」『喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書』（5）

喜入町教育委員会2000「帖地遺跡旧石器編」『喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書』（6）

（永野達郎）



写真1 帖地遺跡ⅩⅡ層の出土遺物



写真2 帖地遺跡ⅠB区の完掘状況